

土田環

富山市は、人口41万8185人(2017年1月末現在)を有する北陸三県の中核を成す地方都市である(石川県金沢市は46万6144人、福井県福井市は26万5720人)。市の平野部は豊かな農耕地を含み、北部には様々な魚介類を育む富山湾があって農業・漁業資源に恵まれている。よく知られた医薬産業にとどまらず、近年では環境・バイオ・IT産業の育成にも力を入れているほか、市の東部には雄大な立山連峰が連なり、2015年3月の北陸新幹線長野・金沢間の開通に伴い、観光客の増加も見込まれている。

その富山市の中心部に位置し、富山県唯一のミニシアターだった「フォルツァ総曲輪」が、9年半の映画上映を終えて2016年9月末に「休館」となった。同館は、市が運営を第三セクターに委託する「公設民営方式」の映画館として、商業的なサイクルには入りづらいアート作品やドキュメンタリー作品を上映するだけでなく、ライブ・スペースや市民のイベント施設としての機能をも併せ持っていた。まちなかの文化発信の役割を担ってきたと言えるだろう。市は休館の理由として、フォルツァ総曲輪が入るビルの老朽化と、近くにシネマコンプレックスが2016年6月にオープンすることで、まちなかに映画館を建てるという当初の役割をフォルツァ総曲輪が終えたことを挙げている。

行政の補助を受け、利潤追求のみに縛られることがなく、コミュニティ・ベースの活動を展開することによって市民にサービスを還元することが、市と映画館の両者にとって理想だったのではないか。

フォルツァ総曲輪開館から休館までの経緯を考察しつつ、公設民営方式による映画館の課題を検討する。

フォルツァ総曲輪
[施設概要]

オープン：2007年2月24日

4階 シネマホール(222.52㎡)：176席(車椅子用8席)
 ライブホール(152.95㎡)：96席(収納形式)

5階 映写室・事務所ほか(479.28㎡)

スタッフ オープン時：チーフ1人、企画2人、映写2人
 2016年度：嘱託職員4人、アルバイト3人

上映 平均4回／1日



富山市の映画館

富山市の映画館の歴史は古く、大正時代初期に遡る。1912年(大正元年)12月、中心市街地の総曲輪を形成する二番町(現・西町)に初めての映画館「富山電気館」が開館している。これは北陸でも初めて(金沢では翌年10月)のことであり、日活と契約して楽士や弁士を大阪から呼び、『春日局・三巻』『西洋悲劇・線路の末』などの作品4本が上映されている。「共楽館」、「錦館」、「中央館」に続き、1917年6月には、第三福助座が「帝国座」と名前を改めて常設の映画館になった。帝国座は、1924年4月6日にフィルム発火により全焼。すぐに再建されて日活系の「帝国館」となるが、太平洋戦争時の空襲により、富山市内に当時存在していた5つの映画館とともに灰燼に帰してしまう。その後、富山市内で映画館の復興がなされるのは、1945年(昭和20年)の年末から翌年にかけてのことである。「帝国館」、「富劇」、「東洋

館]、「大劇」は11月末に共同で新聞広告を出し、映画館の再開が間近であることを予告している。帝国館は、建築材料が不足していることから新川の造り酒屋から酒蔵を譲ってもらい、それを解体して運んで建設したという。1950年から映画人口のピークを迎える1958年にかけて、映画館数と観客動員数は画期的に上昇する。最盛期には県内各地に80館を超える劇場があり、富山市内では14の映画館が営業している。1960年代半ばを過ぎると映画斜陽の波を受けてその数は徐々に減少し、1980年(昭和55年)1月、総曲輪にあった帝国館も惜しまれつつ長い歴史に幕を下ろした。「さよならフェスティバル」と題された最後の特集では、『君の名は』『喜びも悲しみも幾歳月』『ブッシュマン』『未知との遭遇』などの作品が上映された。

その後、1985年になると帝国館跡に、ファッションビル・総曲輪ウィズが建設され、その建物の4階に映画館「ウィズシネマ1」(270席)と「ウィズシネマ2」(156席)がオープンする。この当時は、「グランド1・2」などもあり、まちなかに常設の映画館が複数存在していた最後の時期と言えるだろう。1993年には、ウィズシネマとグランドの同時閉館の噂が流れ始めたことで「富山市の映画館の存続を願う会」が発足。署名活動によってウィズシネマ1・2は松竹系洋画館として存続することになったが、この翌年の1994年10月には県内初のシネマコンプレックス(ワーナー・マイカル・シネマズ)が高岡にオープンし、映画館は郊外型へと変わり始めていた。1996年には、富山市内では初のシネマコンプレックス「シアターワールド大都会」が建設されている。1917年に帝国座として開館して以来、その流れを組むウィズシネマは、2002年(平成14年)に閉館、富山市の中心市街地総曲輪から映画館がなくなる。

中心市街地活性化と「フォルツァ総曲輪」

競売にかけられていたウィズシネマが入っていたビルを落札した業者から、映画館として使用されていた4階、5階部分を寄贈したいという打診が富山市にあったのは2004年(平成16年)のことである。翌年12月、正式な寄贈を受け、市が中心市街地の活性化に役立てたいと市民に積極的な活用を募った結果、ウィズシネマのスクリーンを活用するかたちで公設民営方式の映画館「フォルツァ総曲輪」の開館が決定し、2007年2月24日に営業を開始することになった。

市がフォルツァ総曲輪の開館を決定した時期は、まちづくりに関する施策の転換期とも重なっている。富山市は、「富山市マスタープラン」(平成10年度)、「富山市総合計画新世紀プラン基本構想」(平成12年度)において、拡大型の市街地形成や、住宅地需要の高い地域を中心に新規市街地の誘導を行うことを目指していた。しかし、結果的に市街地は薄く、広くなり続けて中心部の空洞化にもなかなか歯止めをかけることができない。そのため、人口減少による少子高齢化や財政悪化への対策を考慮して、同市ではコンパクトなまちづくりへ都市計画の基本的なあり方を変え、「富山市中心市街地活性化基本計画」(第1期計画は、2007年2月～2012年3月まで)を策定。国から第一号の認定を受け、市民・事業者・行政等の関係者が一体となって、基本計画に掲げられた事業に取り組むことになった。

基本計画の大きな三つの柱は、「公共交通の利便性向上」(5事業)、「にぎわい拠点創出」(13事業)、「まちなか居住推進」(9事業)とされた。路面電車環状線化事業やコミュニティバス運行事業により、富山駅や市の中心部へのアクセスを便利なものにして、中心商店街魅力創出事業やグランドプラザ整備事業などによって活性化を図る中心市街地へ人々の足を向けさせるというものだ。フォルツァ総曲輪の運営は、そのなかで「健康で文化的な生活基盤整備」の基幹事業とされた。

フォルツァ総曲輪の運営

映画館の運営は、富山市が出資する第三セクター「株式会社まちづくりとやま」が担い、プログラムや実務面は、それまで様々な市民活動を行ってきた室伏昌子氏がチーフ・スタッフとなり担当した。

第三セクターとは、国または地方公共団体が民間企業と共同出資により設立した法人あるいは事業体を指す。日本では、日本国有鉄道やJR各社の赤字ローカル線を引き受ける事業主体としての第三セクターが有名だが、公共的な事業に民間の資金と能力を活用するために、1980年代以降は地域振興を目的とした第三セクター会社が日本各地に広がった。

まちづくりとやまは、主に中心市街地活性化計画の策定・実施を行うタウンマネジメント機関(TMO)として、富山市や富山商工会議所をはじめ、商店街振興組合などの中小企業者も出資して2000年7月に設立された。フォルツァ総曲輪が開館した翌月の2007年3月には、近くの「富山西武」跡地に、富山の食材を活かした6つの店舗が集う「越中食彩にぎわい横丁」もオープンしている(現在は営業を終了、フォルツァ総曲輪の入るウィズビルの1階に富山市産の農林水産物の販売を行う「地場もん屋総本店」を運営)。



エントランス

フォルツァ総曲輪
[年度別入場者数]

	シネマ	ライブホール	入場者数計
2007年度	12,287	8,971	21,258
2008年度	13,852	10,293	24,145
2009年度	15,178	6,286	21,464
2010年度	14,144	5,409	19,553
2011年度	13,500	8,648	22,148
2012年度	14,856	10,281	25,137
2013年度	15,477	9,374	24,851
2014年度	16,343	9,088	25,431
2015年度	15,617	8,649	24,266

フォルツァ総曲輪の開館から9年7ヶ月の間、市が年間約1500万円の補助金を投入することにより、フォルツァ総曲輪の収支はほぼ均衡してきた。2007年(平成19年)度から休館する前年度の2016年(平成27年)度まで、平均338日/年の営業で年間来場者数は約2万5千人/年。シネマホール単独では約1万5千人/年の来場者数で、近年ではその数も増加傾向にあったという。

映画館収入、貸館(ライブホール、シネマホール、会議室)収入、物販やチケット、講座などのその他収入を合わせた収入の総計平均は、2239万7千円/年。事業収益だけでは運営にかかるすべてを賄うことは難しい。フォルツァ総曲輪の場合、おおそ年の半期でかかる支出が年間収入の平均を上回っている。その内訳は、雑役務費(約30%)と映画料及び機器等賃借料(約30%)で全体の6割、広報・印刷費が1割弱、そこに光熱費、管理費、清掃委託料が加わる。事業の維持には約1500万円の補助金が不可欠であった。

上映作品は、大手配給会社の作品を軸に据えたシネマコンプレックスとは一線を画し、ヨーロッパ映画やアジア映画、国内のインディーズ作品を、休館までの数年では約120本/年上映してきた。また、ご当地映画の上映イベントや、地元の大学教員による講演・講座の開講、アマチュア劇団や学生音楽団体に対する場所の提供などを行い、市民サービスにも貢献してきたと言える。2014年には、約400万円をかけてDCP対応のプロジェクタ(DLP)を導入し、映画館のデジタル化にも対応している。そうしたなか、2016年度予算で上半期分の約850万円を最後に富山市からの補助金が打ち切られることが決定し、市との協議の結果、運営主体であるまちづくりとやまはフォルツァ総曲輪の休館を選択した。

フォルツァ総曲輪休館の背景

富山市がフォルツァ総曲輪に対する補助金の打ち切りを決定した理由は、主として①施設の老朽化、②上映作品の傾向、③代替施設のオープンの三点に要約できるだろう。

まず、施設の老朽化に関して言えば、ウィズビルは竣工から約30年が経過し、ライブホールや映写室の雨漏り等が発生していた。大規模な改修を行う必要があるが、そのためには営業を休止せざるを得ない。ビル全体の消防や警備の集中管理システムも5階の映画館事務所にあるため、工事を行うとすれば営業に影響を与えることは避けられない。

また、主に「インディーズ系」の作品を上映してきたことで、来場者からは高い評価を得ていた一方、市民のリクエストに応える作品や、子ども連れで楽しめるような映画が上映されていないという厳しい意見が市に少なからず寄せられていたという。そもそも、市は中心市街地の「賑わいの創出」のために映画上映事業を補助してきたのであり、上映作品の選定には関与していない(言い方をネガティブに変えれば、関心がない)。行政の支援を受けながら第三セクターが運営を担う以上は、周辺商店街や地域を含めた中心市街地の活性化＝公益に資するべきであるというのが市の考え方であり、費用対効果を入場者数という観点からのみ考えれば、作品のラインナップと来場者数の観点から、フォルツァ総曲輪がそれを果たしているとは考えがたいということなのだろう。

そして、フォルツァ総曲輪休館を決定的にしたのが、シネマコンプレックス「J MAX THEATERとやま」の開館決定(営業開始は2016年6月3日)だった。駅前から延びる城址大通りを挟み、フォルツァ総曲輪から200メートルに位置する場所に建設された「ユウタウン総曲輪」は、J MAX THEATERとやまのほか、入浴・宿泊施設や飲食店等が入居し、駐車場を兼ね備えた複合型商業施設である。中心市街地に人を呼び戻すための再開発事業として計画された施設であり、富山県も富山市も一部出資を行っている。まちなかで映画を見られる環境を整えるという意味において、シネマコンプレックスが近隣にできたことで、フォルツァ総曲輪はその役割を終えたと言え、富山市は考えたのである。



ユウタウン総曲輪

J MAX THEATERとやま

アクセス：富山駅から路面電車等を利用して15分程度

駐車場200台(映画鑑賞の場合、入庫後2時間半無料)

8スクリーン1178席(+車椅子専用スペース13席)

公設民営方式の芸術文化施設の課題

これまで述べてきた、富山市およびまちづくりとやまがフォルツァ総曲輪休館を決定した理由から、公設民営方式の芸術文化施設の運営面における課題や、地方におけるミニシアターの現状を垣間見ることができるだろう。

そもそも、映画館事業は、経済的な収益を上げることの難しいビジネスである。それが地方都市であるならば尚更のことであろう。中心市街地活性化のために映画上映施設の開館を富山市が決定した時点以上に、現在は映像受容メディアの多様化が進んでいる。こうした状況が明らかうえで映画館を維

持するのか否かという決定をするのであれば、映画そのものがまちづくりのなかで果たす役割を議論する必要がある。映画館運営を公共サービスとして提供するのであれば、行政側もその文化的・社会的な意味づけをより検討すべきだったのではないか。映画館を建てれば、そこに人が集まり周辺施設にお金が落ちるといふ再開プランは、今日において成立させることは容易ではない。

一方で、運営を担うまちづくりとやまの側も、事業の効果や成果を広く市民に問うべきであろう。その意味では、行政(富山市)、第三セクター(まちづくりとやま)、現場スタッフ(フォルツァ総曲輪)の三者が、緊密なコミュニケーションや理念の確認を行いながら映画館の運営を行っていたか、疑問が残る。「公益」に資する事業を運営する第三セクターは、事業自体の広報活動には不慣れであり、また、スタッフは日々の業務に追われるなかで、限られた人員・予算では広報にまで手が回らない。結果として、それぞれに目指すべき理念はあったかもしれないが、映画館の活動やその必要性が市民に十分に伝わっていたとは言えないのではないか。

また、「公益」とは、差し迫った現状の改善ばかりを見つめるだけでなく、将来的なコミュニティのヴィジョンをも指し示すものでなくてはならない。実際に、手頃な料金で利用することのできたフォルツァ総曲輪のライブホールが借りられなくなり、学生や市民団体などでライブや公演を行うことが難しくなったという声も少なくない。また、フォルツァ総曲輪のように、車椅子の来場者でも移動しやすい十分なスペースを持った、バリアフリーの映画上映施設が市内にどれだけ存在しているかを調査することも残された課題である。

映画館と公共性の今後

シネマコンプレックスの開館によって、フォルツァ総曲輪の役割が終わったと市は説明するが、市民の持つ選択肢という観点からすれば、フォルツァ総曲輪の休館はコミュニティにとって多様な選択の喪失を意味する。J MAX THEATERとやまの開館以後、高校生や専門学校生など、若い人々が映画を見るために中心市街地へ足を運ぶようになったが、休館までの数ヶ月間のフォルツァ総曲輪の来場者数に変動はなかった。つまり、富山市の場合、上映作品の異なるシネマコンプレックスとミニシアターで観客を奪い合うことはなかったと言える。にもかかわらず、一方のみを選択するのであれば、行政がその地域文化の独自性・多様性を「放棄」することにもなりかねない。

現在、富山市内にはシネマコンプレックスが3館(J MAX THEATERを除く2館は市の中心部からは車でアクセス:「シネマワールド大都会」および「TOHOシネマズファボレ富山」)があるが、その上映作品はほとんど変わらない(J MAX THEATERに関しては、番組編成を東宝が直接行っているという)。

映画館のデジタル化に伴い、全国的に公開時期が統一され、どこでも同じ作品を見ることが可能になった反面、プログラムは平板化の一途をたどっている。シネマコンプレックスとミニシアターの棲み分けや、行政によるシネマコンプレックスの1スクリーン借り上げなど、多様な選択肢の確保を公共性の視点から検討する必要があるだろう。

現在のところ、フォルツァ総曲輪は「休館中」であり、「閉館」されたわけではない。市の担当者によれば、2017年度にビル自体の改修を行い、同時に今後の施設の活用方法を考えていくという。本来なら、今後の活用の方針に基づいて施設が改修されることが望ましいだろうが、上映事業が再開するかどうかは完全な白紙状態である。仮に再開するとして、興行として観客が少なくとも恒常的に上映を行うのがあるのか、期間を絞った上映と貸館事業などを併用するのか、意見は様々あるだろう。あるいはまた、事業委託のあり方やスタッフの雇用もこれまでとは異なり、見直しを迫られるかもしれない。しかし、先述したように、公設民営方式の映画館として、その理念をどのように共有すべきか、議論と研究を積み重ねなければ、上映施設として生き残ることは難しいに違いない。

2016年11月25日には、富山市中心市街地の中央通り商店街に「カフェシネマ・ほとり座」(代表・田辺和寛氏)がオープンしている。ほとり座では、2年前からカフェおよび音楽ライブの営業を夜のみ行っていたが、フォルツァ総曲輪のスタッフや観客の意思を汲み、それまでのスペースを改装して映画上映施設をオープンした。

座席数20席、2～3作品を1日4～5回ほどブルーレイで上映するという上映環境やスタイルを一般的な映画館と比較することはできない。ほとり座＝フォルツァ総曲輪の代替施設と考えることは難しい。

しかし、ほとり座のような映画を通したコミュニティ・スペースの広がりや可能性には着目すべきであろう。

土田環(つちだたまき) 映画研究者／早稲田大学理工学術院専任講師



カフェシネマ・ほとり座

[取材協力] 室伏昌子(café54 & オフィスムロフシ)／田辺和寛(ほとり座)／宮西啓一(株式会社まちづくりとやま)

富山市役所中心市街地活性化課(酒井真実子、奥沢靖)／松岡等(北陸中日新聞)／樋口ゆちこ

[参考文献] 富山市編『富山市史 通史 下巻』(富山市、1987)

堀江節子『総曲輪物語 繁華街の記憶』(桂書房、2006)

原玄一「富山キネマ小史」、『北陸中日新聞』(1982年1月5日～6月29日、毎週火曜日連載、25回)

八尾正治「とやま劇場小史」、『北日本新聞』夕刊(1990年1月9日～1992年2月25日、毎週火曜日に連載、106回)